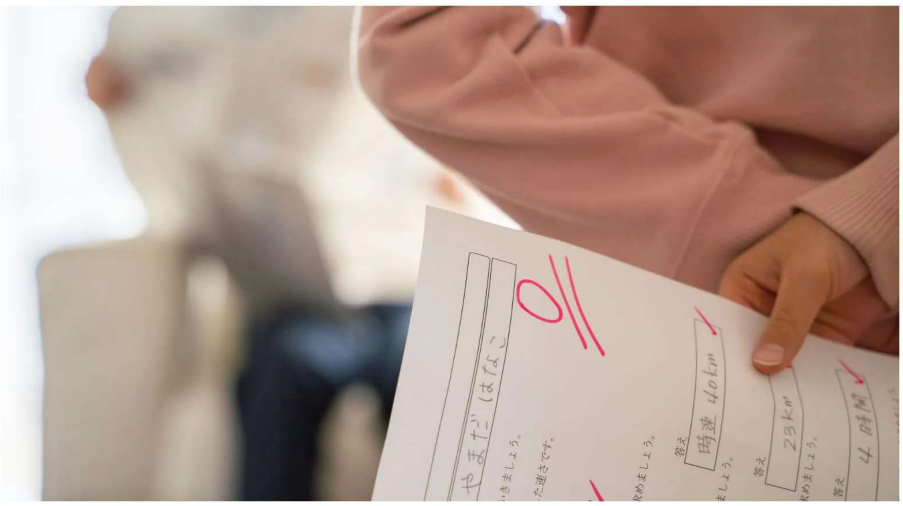
わが子が「発達障害」とわかったら考えるべきこと

和田秀樹「苦手なことを諦めれば東大に入れる」

和田 秀樹：精神科医

2022年11月21日



「発達障害」だとわかった子。親としても苦手を克服させようと考えてしまいますが……（写真：ノンタン／PIXTA）

周りの人と比べても苦手なことが多く、ある時「発達障害があることがわかりました」という生徒。このまま学校や社会で上手くやっていけるのか、心配だと言います。苦手なことはどのように克服していったらいいのでしょうか。

精神科医の和田秀樹氏が未成年の皆さんのモヤモヤやお悩みに答える新著『15歳の壁』より、一部抜粋・編集してお届けします。

不得意なものを伸ばそうとする「落とし穴」

「発達障害があることがわかりました」という子へ、和田秀樹先生からアドバイス

ADHD（注意欠如・多動症）の特性があると、失敗を叱っても失敗をなくす効果はあまりありません。周囲の人と話し合って、「この失敗だけはしない」と目標を決めて、点検し、次第に失敗の頻度を減らしていく環境を整えることで解決していきます。

発達障害に限ったことではないですが、とりわけ自閉スペクトラム症の子どもには過集中の特性があり、ADHDの子どもには好奇心旺盛な特性があります。こうしたことが強みになって、プロフェッショナルとして活躍している人もいます。

欠点が直しにくいのが発達障害の特徴ですから、欠点に注目する限り、生きづらくなる一方です。日本の親や教師は、欠点のない子どもを育てようとします。算数が得意で国語が苦手な子どもがいると、「国語も算数並みにできるようにしなさい」と言います。

でも、それでいいのでしょうか？　得意な算数を伸ばした方が、社会に出てからのアドバンテージになります。

受験だって、数学がめちゃくちゃできれば東大に受かります。親や教師は、苦手科目がない子が東大に受かると思い込んでいますが、実は数学で高得点を取れる方が合格の可能性が高いのです。

僕が東大受験をしたときも、ある時期からいくらやっても国語の点数が伸びないことに気づき、国語で高得点を取ることを諦めました。開き直って方針を変え、合計点で何点をクリアすれば理Ⅲに受かるかという発想に切り替えました。力を入れる科目を自分の得意な科目、好きな科目に絞ったのです。

得意な科目、好きな科目の方が、勉強が辛くないという気持ちもそれをあと押ししました。数学は100点だったのに国語が20点だったら、国語を頑張らなきゃと思ってしまう気持ちはわかりますが、同じように勉強していて、一方が100点でもう一方が20点だとしたら、100点を取れる科目があなたに向いていて、あなたが好きな学問なのです。

20点の国語でジタバタするより、1学年上の、ワンランク上の数学の問題にチャレンジしろよ、と僕だったら言います。欠点よりも長所を見て伸ばすという考え方を、ぜひ持ってほしいものです。

欠点のない子に育てよう、失敗しない子にしたいというのは、親にしてみれば大事な目標かもしれませんが、日本社会特有の思い込みにすぎません。

何度も破産したトランプ氏が大統領になれた理由

アメリカのトランプ元大統領が、何回も破産しているにもかかわらず、大統領まで上り詰めたことからもわかるように、欧米では失敗の回数が多いほどむしろ評価されるという傾向があります。

銀行の事業融資の審査では、失敗を重ねていても、失敗から立ち上がるチャレンジ精神と評価され、失敗から学んで次は成功するだろうと受け止めるという健全な楽観主義が前提にあるといわれています。

学校教育では、個性だとか、創造性だとかいっていますが、その評価のしかたは、旧態依然とした「真面目に宿題を提出しているか」「良い姿勢で授業を聞いているか」「毎日遅刻・欠席をしないか」という外形的なもので、生徒の「意欲・態度」を決めています。

そんな中身のない評価基準では、本当に才能のある人、面白い人間が学校教育から出てくることは期待できないでしょう。

文科省の役人も、「生きる力」だとか「アクティブラーニング」だとか、目先の新しい理念には飛びつく割に、現場の評価は相変わらずで、「失敗を恐れない」「欠点を欠点のままにして長所だけ伸ばせばいいんだ」といった発想にはなりません。

教育学者も、学習障害の子どもの指導法といった本は書いていますが、その子にもともとある長所の伸ばし方に注目していない。依然として「できる・できない」の評価に囚われているように感じられてなりません。

学校が「意欲・態度」を評価するときに、失敗した原因や回数で子どもたちを評価するようになると、一人ひとりの子どもが見えてくるのではないかと思っています。もちろんそれには、1クラスの子どもの数を20人未満にし、先生の数、教育予算を思い切って増額するなどの環境整備が必要なことは言うまでもありません。

『15歳の壁: 乗り越えた先に見えてくる君の未来』（合同出版）。書影をクリックするとAmazonのサイトにジャンプします

パラリンピックの「本来の意味」

パラリンピックを観察してみると、選手は障害をカバーするのではなく、健常な部分を極限まで伸ばして、記録を更新するという発想をしています。「障害があるのに頑張ってる」という視点から見ている人が多いですが、本来の評価としては、障害者が持っている健常の部分が、心身ともにすごい、という見方をすべきなのです。

物事の負の面ばかり見ていたって、何にも出てきません。世の中は、頭がいい人間、勉強ができる人間、性格が良い人間、とカテゴライズしたがり、残念ながら発達障害に対する評価もそうなっています。どんな人にも欠点と長所があるのです。自分の長所に注目してください。

▼欠点を直しにくいのが発達障害の特徴
▼欠点を見ていても始まらない
▼長所を伸ばそう

東洋経済 TOYOKEIZAI ONLINE

東洋経済ID関連サービス

- The ORIENTAL ECONOMIST
- 東洋経済education × ICT
- 会社四季報オンライン
- シキホー！Mine
- 業界地図デジタル
- 東洋経済STORE
- 東洋経済デジタルコンテンツライブラリー
- 株式ウイークリー

法人向け関連サイト

- 法人向けデータサービス
- 東洋経済広告
- 東洋経済プロモーション
- 東洋経
- 東洋経
- 教科書

東洋経済新報社について

運営会社 | 採用情報 | 公式アカウント一覧

東洋経済オンラインについて

サービス紹介 | 広告掲載 | プライバシーポリシー | 知的財産 | 特定商取引法に基づく表示 | 東洋経済ID利用規約 | 利用規約 | お問い合わせ

Copyright©Toyo Keizai Inc.All Rights Reserved.